

深沢七郎集

現代の文学 ◆ 31

現代の文学 = 31

深沢七郎集

河出书房新社

現代の文学31 深沢七郎集

七
郎

© 1965

責任編集

川端康成 丹羽文雄
円地文子 井上靖
松本清張 三島由紀夫

昭和 40 年 3 月 1 日 初版印刷
昭和 40 年 3 月 8 日 初版発行

定価 390円

著 者 深 沢 七 郎
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 高 橋 武 夫
装 幀 原 弘 (N.D.C)

印 刷・大日本印刷株式会社
本文用紙・本州製紙株式会社
函 貼・神崎製紙(ミラーコート)
同 納 入・東邦紙業株式会社
クローズ・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7
振替口座 東京 10802

製本・美行製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

千 秋 楽	三
笛 吹 川	一五
檜 山 節 考	二四九
東北の神武たち	二八五
かげろう囃子	三二
朝鮮風小夜楽	三六
東京のプリンスたち	三六

枕 經 三九四

揺れる家 四二

三つのエチュード 四九

年 譜 四七

解 説 高橋和巳 四二

挿画 谷内六郎
写真 三木 淳

深沢七郎集

千
秋
樂

東京駅の出口から人波を押しつけて急ぎ込んで出てきたが、目の前のビルを見上げて、ドンチョーは、ちょっと立ち止った。このビルの7階の劇場へ駆けつけたのだ

った。きめられた2時までにはまだ15分も早いのだが、間があるというよりも、これからそこへ行くのに気を落ちつけるためだった。これからそこへ行つて、使つてもらう交渉をするのだが、売り込みに来たのではなく電報で呼ばれたのである。だから、ひきめもないのだが、この劇場は芸人たちの松舞台なので少しおじているのもあった。そんな弱味を劇場の人に見抜かれては損なので、ゆっくり、ビルのほうへ近づいて行つた。腕をくんで、下を向いて、なんとなく、つまらなそうな恰好をしてエレベーターの前に立つた。プーンと、ナフタリンの匂いが、着ている背広から鼻へ突きさすように強いのは、この背広は、さつき、浦和の質屋から出してきたばかりだからである。この半年ばかりは仕事をしていないから、背広も時計も質に入れてしまったが、この電報を見ると、「あそこへ出るなら、洋服を出さなければ」と、

おふくろは頼みもしないのにすぐ出してくれたのである。質は、今までおふくろに何回も出して貰つたが、こんどは嫌な顔もしないで、はね上るように「洋服を出してこなければ」と心配してくれたのは、この劇場へ出演することはドンチョーの芸が初めての松舞台にのること、それを、おふくろは自分が舞台に立つと同じように思っているからである。

「よかつたよ、まにあつて。電報見たかい」

エレベーターから降りると、その廊下のソファに師匠の奥さんが腰をかけて待っていた。電報をくれたのはこの師匠の奥さんである。

「コレが出来ちゃつたんだよ、また」

と、師匠の奥さんは小指を出した。師匠は大阪の劇場へ出ていて、そつちで好きな女が出来てしまったので帰つて来ないのである。この劇場へは師匠の芸が買われたのだが、帰つては来ないで、ドンチョーを代役に、という師匠の電報を奥さんは受け取つて、奥さんがドンチョーに電報で知らせてくれたのだった。それでも奥さんはまだ心配してくれてここへ来ていたのである。それほど気にかかる大切なこの劇場の仕事だった。

「また、始まつたんだよ」

と、奥さんは師匠の女癖の悪いのをボヤきはじめた。そんな女狂いのおかげでドンチョーはこの松舞台に出入

れるのだから、奥さんのボヤクのも無理はないが、師匠の悪口を言うのも申しわけないような気がしているのだ。それよりも、自分の芸がどんなにうまいか、それを見てもらうチャンスなのである。

「いいかい、わたしが、大体、話しといたから」

と、奥さんはドンチョーと並んでソファに腰かけているが、寄りかかるようにそばへ寄ってきてドンチョーの耳へささやいた。もう、事務所のほうへは代役の話をつけてくれたらしい。

「きまつたんですか」

と、ドンチョーは念を押して聞いた。

「そうだよオ」

と、奥さんは軽く請け合った。

「そりゃア、だいじょうぶだよ、うちのヒトの顔が効くんだよオ」

と、奥さんは、20年も、30年も、この世界に顔を突っ込んできたのだから「顔がきいて」と、鼻を高くしているのだ。奥さんも前は芸人だったが、もう足を洗って、落ちぶれたようなものだが、こんな風に顔が効くことがなくなるとまだこの世界に活躍しているような気がしているらしい。奥さんは一方的に出演をきめているようである。それに、師匠の顔できめたということが自分の力のようにも思っているらしい。

「しっかりするんだよオ」

と、奥さんが言った。

「やりますよ、やりますよ」

と、ドンチョーは言った。うまく演ることが師匠や奥さんの顔を立てることにもなるのである。それより、まず、自分の芸の絶好のチャンスなので、力の続くかぎりを出す気だった。横の事務所から臙脂の派手なジャンパの若い青年が顔を出した。

「富田さーん」

「おお」

と、ドンチョーはうなずいた。

臙脂のジャンパーの青年は顎を事務所のほうへ向けた。ドンチョーは事務所へ入って行った。

事務所の中は広い板の間で、その板をふめばギシギシ鳴った。ボロ家の中のようにだが、上等なソファがずーっと並んでいて、そこには芸人たちが多勢、腰をかけている。

「キミが、富田長次郎」

と、ドンチョーは言われた。

「はア」

と、ドンチョーは答えた。それから、「トミ、チョーだから、ドンチョーと言われています、よろしく」と、頭をさげて自己紹介した。

ドンチョーというのは、ドンチョー役者とかドンチョー芝居とかいう下手な役者の言葉からきたのだが、下手だという呼ばれかたはまた、愛嬌でもあった。

「オレが、演出を手伝ってるんだ」

と、臙脂のジャンパーの青年は挨拶してくれた。

「キミね、あのヒトと打ち合わせしてくれ」

と、臙脂のジャンパーの演出助手は言いながらドンチョーの背中を軽く叩いた。相手はどのヒトか判らないが、ドンチョーがまごついていいると、

「ああ、頼むよ」

と、むこうで、脚本で手招きをしているのはドンチョーと同じぐらいの年のまだ若い男である。グリーンンのセーターで、上等なズボン、上等な黒い靴、金廻りがいいらしい。

「これ、この、クマちゃんだけど」

と、グリーンンのセーターの男は言った。ドンチョーの役は熊の役らしい。

「ああ、なんでもやりますから」

と、ドンチョーは途端に、その男に吞まれてしまったようになってしまった。命令されて、それに従ってしまったようである。相手は若い貫禄があるので、この事務所の係長級らしい。脚本はもらって、家へ帰って読ませて貰うことにきめて、

「これ、いつからですか？」
と聞いてみた。

「いまやってるショウが、今月いっぱい、次のショウは、来月の3日が初日で、31日の夜から、1日、2日と舞台稽古だが、2日の夜は徹夜でやるから徹夜のあしたが初日だよ」

これで大体の様子は判ったのである。グリーンンのセーターの男は続けて、「31日の夜、このショウが終つてから、ちょっと打ち合わせに来てくれよ、稽古は2日の朝、10時からだよ」と言つて、これで、今日はすんだのである。男はまた、

「そんなにむずかしく考えなくていいよ、どうせ、このショウは、お目当てさんはストリップだから」

と言つて、ニヤツと笑つた。この劇場はストリップが売りものになつているが、高級なストリップショウである。画家が裸体をかくように生きている女体を芸術的に見せるショウである。ショウだからいろいろな芸人も出演するが、芸人というより芸術家のようなセンスで見せるショウの構成になつてゐるのだった。

「それから、キミ、この劇場、はじめてかい……」

と、ドンチョーは聞かれた。

「ええ」

と、ドンチョーは白状するように言つた。この劇場の

ような絵舞台に今まで出演出来なかった弱味を出してしまふようなものだが、嘘は言えないのである。

「そうかい、それじゃア、いま演^やつてるショウを見ていけよ」

と、その男は親切に言ってくれた。どんな舞台だか、客になって舞台を見ておけばショウの演^やりかたも判るのである。

「それじゃア、みせてもらいます」

と、ドンチョーは頭をさげた。お客の目当てはストリップだと言われたが、ストリップよりいま出演している芸人たちの芸をすぐ見たくなった。

「よオー、このヒト、見せてやってくれよ」

と、その男は、また言ってくれた。

「うん」

と、さっきの臍脂の演出助手がうなずいた。が、何か、ほかの打ち合わせをしていて忙しいらしい。

「外にいます」

と、ドンチョーは言つて廊下へ出た。事務所の中は芸人たちの打ち合わせでざわめいているから、用事がすめば早く出たほうがいいのである。

「あら、もうすんだのかい」

と、師匠の奥さんはまだソファに腰かけて待っていてくれた。

「ええ」

と、ドンチョーは言った。

「じゃ、帰ろうか」

と、奥さんは言つた。

「いま演^やつているショウを見てゆけと言われたから」

「そうかい、そりゃ、見といたほうがいいよ」

と、奥さんはすぐ帰つてしまふらしい。

「じゃ」

と、ドンチョーは手を振つて奥さんに合図した。

「しつかり、がんばるんだよ、見に来るから」

と、奥さんはまだ心配している。

「おい、来いよ」

と、事務所から演出助手が出てきて言つた。それから、「見て行きますか?」と、奥さんにも言つた。

「悪いわねえ、私も見せてもらおうか」

と、奥さんが言つた。それから、「ほんとに、よろしくお願^{ねが}いします、この子を」と、ぐーっと低く頭をさげた。

「うん、うん」

と、演出助手は軽くうなずいた。劇場の入口にまわると「千秋楽^{チウキョク}祭り」と大きく書いてある新しい看板が出てくる。

「じゃ、どうぞ」

そう言つて、演出助手は客席へ案内してくれて引き返した。

「あ、いけねえ、脚本ほんをもらうのを忘れた」

と、ドンチョーはさっきの自分の役の脚本を貰うことを思いだした。あわてて事務所へ引き返すと、さっきのグリーングリーンのセーターの男はまだ打ち合わせをしていた。

「あの、さっきは」

と、ドンチョーは挨拶をして、「脚本をもらいたいのですすが」と言うと、

「脚本ほんなんかないよ、脚本ほんの必要なんかないよ、キミの演るところはすぐ判るから。脚本ほんが足りないんだ、セリフの多い役だけしか持っていないんだ」

と言うのである。

「ああ、そうですか」

そう言つてすぐホールへ引き返した。ドンチョーは顔をひっぱたかれたようだった。脚本ほんがいらないのは、端役はなやくだということなのである。師匠の代役なのでもっと大役だと思つていたのだった。

ホールへ入るとシヨウは真つ暗な場面らしい。うしろの壁に奥さんと並んで寄りかかった。真つ暗な舞台の隅に薄い照明があたつていて、女の口が何かシグサをしてゐるらしい。

「ここは、いい劇場げきやうだから」

と、奥さんはシヨウのほうよりも劇場のことばかりを気にしている。

「よオ、来週でるんでシヨ」

と、暗い中で男の声がした。誰か、ドンチョーに話しかけたのだ。

「ああ、そうです、来月からのシヨウに」

と、ドンチョーは丁寧に答えた。

「ボクも、出ますから」

と、相手の声がした。さーっと、舞台が明るくなってドンチョーは相手の顔を見つけることが出来た。細長い青いツヤのない皮膚はドーラン焼けで、仕事を絶えまなくやっている顔である。

「さっき、事務所にいたでシヨ」

と言われたが、ドンチョーはこの男に見おぼえがなかった。

「ハア」

と、ドンチョーはまごついた。

「おたくは、お芝居でシヨ」

と、また言われた。

「ハア」

と、ドンチョーはまごついた。もうドンチョーのことをよく知つていて、抜け目がないほどこの世界のことには目が速いのだ。それに女性的な言葉づかいは女の口ば

かりのなかにいた芸人の癖らしい。

「おたくは？」

と、ドンチヨも相手の役をきいた。

「ウターあ、やってます、よろしくね」

と、むこうはいやに慣れなれしい。横で師匠の奥さんが、

「イロモノいっぱいんだろ」

と、ドンチヨにささやいた。奥さんはショウなど全然見ていないらしい。ドンチヨの役のことばかりを気にしているのである。イロモノいっぱいというのはドンチヨの芸ばかりで一景を演ることである。

「どうなるかなア」

と、ドンチヨは言った。そんな大役ではないらしいが、いまは奥さんと話すよりも、この唄い手と話すほうが肝腎である。この男は、ここの様子をよく知っているらしい。

「いつも、出ているのですか、ここに」

と、ドンチヨは聞いてみた。

「はじめてですよ、来週が」

と、男は言うのである。よく知っているらしいが、初めてだというのでドンチヨも安心した。

「来月のはじめからやるショウでしょ」

と、ドンチヨは言った。来週来週と言うので、ドン

チヨには変に思えるのだった。

「そう、来月からヨ」

と、唄の男は女の言葉とそっくりになった。むこうも、もう、友達になったのである。

「ここは、千秋楽は一日だけではなく一週間あって、千秋楽祭りって言って、今週だけ、いろいろな人のトクシユツがあるのヨ」

と、唄い手の男は教えてくれた。トクシユツというのは特別出演のことである。隣りで師匠の奥さんが、

「イロモノでないと、どんなだろう」

と、ドンチヨにささやいた。たぶん、奥さんは師匠の演っている芝居を、そのままここでドンチヨが演ると思っているらしい。

「どんなことをやるかなア、熊になるらしい」

と、ドンチヨもまだ判らないのである。この唄の男はもうきまっているのかと、

「あなたの、唄は？」

と、聞いてみた。

「持つてる唄よ」

と、あっさり言っ長い真ッ赤な舌をペロツと出した。

この男は自分のふだん歌っているお得意の唄を歌えばいいらしい。が、あっさりと言って舌を出す様子ではあ

まりいい唄でもないらしい。それに、自信もないらしい。そんなに気軽くこの舞台に出られるという気持を、ドンチョーは軽蔑したくなった。(勿体ねえな、こんな奴、こんな劇場に出るのは)と、侮辱したくなった。

舞台の横のバンドが激しく鳴りだした。これから外人の奇術が始まるらしい。

「へんだねー、熊の役で、ぬいぐるみの熊かねー、トンボ切るなら、なんとか手はあるんだが」

と、奥さんは心配している。

「脚本を見れば、出来るよ」

と、ドンチョウは言った。どんなむずかしい役でも立派に演ってみせるという自信をドンチョーは持っていた。舞台では外人の奇術が始まった。あまり、上手でもないらしい。それに、縄など持ち出してふざけてばかりいるのである。

「あれ、なんですか？」

と、ドンチョーは唄の男に聞いてみた。

「あれ、うまいでシヨ」

と言われた。

「そうですね」

と、ドンチョーは言ったがこれは合いづちを打っただけである。

「あれ、ずいぶんうけているのよ」

と、また、唄の男が言った。ドンチョーはさっぱりわけがわからなくなっていた。熊の役を演ずるといふことと、それを一所懸命演ずるといふことのほかにはもう頭の中に何も考えていないのである。

「ぬいぐるみの熊で、トンボ切るなら、洋楽でやるのだろうかねえ？」

と、奥さんはそのことばかりを心配している。

「洋楽でも、なんでも、合わせて、やるよ」

と、ドンチョーには自信があった。舞台のシヨウは自分には関係のない場面なので、ただ見ていだけでなんの興味も感じない。奥さんもドンチョーの演ることのほかに何も考えてはいないらしい。

フィナーレまで見て、ドンチョーは浦和の家へ帰ってきた。次は月末の31日に出て行くのだがそれまでには5日間もあいだがあった。が、ドンチョーは毎日劇場へ行った。事務所へ顔を出したり、いま演っているシヨウを何回も見たり、楽屋の入口のソファに腰をかけたりしていた。あの唄の男もずっと劇場へ顔を見せていた。今のシヨウも次のシヨウもドンチョーのような日本物の出演者はドンチョー一人だけで、みんな洋楽関係である。ドンチョーには劇場も初めてだが、出演者の顔ぶれも初めて逢う人たちばかりである。

31日の夜、ドンチョーは早めに事務所へ行った。あの

臙脂のジャンパーの演出助手に、

「千秋楽で、おめでとうございます」

と、挨拶した。

「おお」

と言った。ここでは千秋楽もドンチョーが考えているほど昔風ではなく、ただショウが終るということだけにしか思っていないらしい。次のショウの仕度と、いまのショウの後始末で忙しいだけなのだ。ショウは変るが出演者の大部分は劇場の専属で、次のショウにも出演するのである。

「ああ、ああ、キミ、キミ」

と、ドンチョーはグリーンのセーターのあの若い男に声をかけられた。この若い男は演出の責任者ではなく、今、売り出している笹山たん児というコメディアンでドンチョーと同じ芝居をするのである。そんなこともドンチョーは知らなかったほど、この劇場関係には初めてだった。

「キミね、8景と9景の男爵と」

と、笹山さんは言って、「それから、20景の酒場の男だよ」と言うのである。男爵の役と酒場の男の役らしい。

「熊の役は」

「ああ、熊ちゃんは変わってもらったよ、キミと同じ場面で、ぶつつかるから」

と言うのである。

「男爵というのは」

と、ドンチョーは聞いてみた。

「バリの男爵だよ、街を通ってバリのパン助の尻を追う男爵だよ」

と、説明してくれた。これでドンチョーの役はよく判ったのである。

「これ、読んでいて」

と、笹山さんは脚本ほんをおいてくれた。さーっとドンチョーは目を通した。男爵というところのセリフは少ししかない。それでもメモしておぼえなければ困るのである。

「ちよっと、書いてきますから」

と、ドンチョーはポケットから万年筆を出そうとした。

「その脚本ほん、あげるよ、余ったから」

と、笹山さんが言った。

「この男爵と、あと、20景の酒場ですね」

と、ドンチョーが聞いた。

「そう、酒場の景の男の、A、B、Cの3人のうちのBの男をやってくれよ」

と、笹山さんがきめてくれた。

「それじゃ、脚本ほん、よく読んできますから」

と、ドンチョーは言った。これでドンチョーの役は全部きまったのだ。

「あしたの朝から、やるからね」

と、笹山さんが言った。

「8時ですね」

と、ドンチョーは時間をたしかめた。

「そう、じゃア、頼むよ」

と、笹山さんが言った。これで打ち合わせはすんだのである。まわりのどの椅子でも打ち合わせでそうぞうしい。まだ出演者がきまっていないものもあるらしい。こんどのショウからは専属以外の特別出演が多くなるそうである。

「それじゃア、あした」

と、ドンチョーは言って事務所を出た。

「よオ」

と、声をかけてむこうを向いているのは裏方のトンチヤンである。廊下で顔なじみになったのはこの人だけである。いつも腰のバンドに金槌をさしていて、この金槌は全然さびていない純銀の金槌のように光っているのがトンチヤンの自慢である。

「部屋、決まったのかよオ」

と、トンチヤンに聞かれた。

「いや」

と、ドンチョーが言うと、

「決まってるじゃねえか、2階のDの部屋だよ」

と言っている。

「もう、決まってるんですか」

そう言って、ドンチョーは部屋をみておこうと階段のほうへ行った。2階のDの部屋にはまだ入ったことがない。階段をあがればすぐそこである。ドアには新しい紙が貼ってあって、太い墨の字でドンチョーの名前が書いてあるのだ。あしたになればこの部屋へドンチョーが入るのだが、今日までは、いま出演している人たちが入っているのである。

「おたくと、同じ部屋だったでショ」

と、聞いたことのある声がするので振り返ると、唄の男が階段の下でこちちを向いていた。こちちへ上って来るらしい。この女の言葉づかいの唄い手はいま売り出している歌手の高山ノボルだったのだ。

「そう、よろしく、頼むよ」

と、ドンチョーは階段を上って来る高山ノボルに言った。

「8人よ」

と、ノボルは笑った。それから階段を上って来て、ドンチョーの耳許へ、「あの部屋、7人しか入れないのに」と、小さな声で言って、また笑った。